●作品タイトル
今も護りて

●著者名
粟生深泥

●あらすじ
港の拡張計画で、住民から「祟られる」と撤去を反対された古い防波堤。県から出向中の豊島が来歴を調べると、その正体は終戦まで町を守った駆逐艦「粟」だった。住民が密かに沈めた軍艦防波堤と知った豊島たちは、町の記憶を未来へ残すため、撤去ではなく活用する新たな改修計画を実現させる。

●本編の文字数
４９９９字

「お前ら、あの防波堤を撤去するとか！」

菊水町役場の土木課に乗り込んできた老齢の男性が大声でがなり立てる。

課内の視線が私に集まってくる。確かに港の整備の担当は私だけど、出向者への配慮とかがあってもいいじゃない。

こういうときに積極的に対応してくれる課長は町議会の対応で外している。

仕方ない。ため息をつきたくなるのを抑え、男性の元へと向かう。

「どうされました？」

「菊水港の防波堤ば撤去するとやろ！　そぎゃんこつしたらこの町は祟らるっばい！」

男性は杖を持った右手をぶんぶん振るようにしながらカウンター越しに詰め寄ってくる。

まただ。菊水港の改修計画が表に出た途端、祟りが起こる、呪われるといった意見が多数寄せられるようになった。

「その件については、近日中に説明会を開きますので……」

男性はしばらく「祟り」、「恩知らず」といった言葉を放ち続け、やがて迎えにきた家族に連れられて役場を後にしていった。

時間にすれば三十分足らず。だけど、席に戻るとどっと疲労感が溢れてきた。これも仕事だと言われればその通りだけど、祟りや呪いなんてものを相手にどう説明すれば納得してもらえるかもわからない。

何がこの町の人をここまで駆り立てるのだろう。

――菊水港南防波堤。

戦後まもなく建設されたらしい古めかしい防波堤をモニタに映してみるけど、私には何の変哲もないコンクリートの箱にしか見えなかった。

＊

「豊島さん。昼過ぎは大変だったって聞いたけど」

夕方、議会やその他の会議の対応を終えて戻ってきた柳課長が私のデスクにお茶のペットボトルを置いてくれた。

「最近はちょっと慣れてきた感じがします」

「それは由々しき事態だねえ」

自分のデスクに戻った柳課長が苦笑を浮かべる。

課長といっても、国からの出向者で年齢は私とほとんど変わらない。そんな三十代半ばの課長は私の軽口を本気で心配しているようで、こちらが申し訳なくなってしまう。

「ここまではずっと歓迎ムードだったんですけどね」

これまで特に目立たぬ地方の町であった菊水町が、猛烈に沸いていた。

アメリカの有名なドローン企業がアジアでの生産拠点として、菊水町に大型工場を建てることとなった。

それまで一日数便の離島へのフェリーと漁船くらいしかいなかった菊水港に、工場用の資機材を満載した貨物船が入ってくる。今は受入ばかりだけど、ドローンの生産が始まれば、移出や輸出も行うこととなる。

そうなると、今の菊水港の設備では賄いきれない。港を拡幅しようにも、港の管理者である菊水町には人手もノウハウも足りなかった。

「豊島さん、これまで県の工事が呪いとか祟りで止まった経験ってある？」

「噂では聞いたことありますけど、私自身は経験ないですね」

菊水港の整備を急ピッチで進めるため、国や県から応援が入った。柳課長は国で、私は県庁の土木部で港湾関係の仕事をメインにやってきて、今は菊水港の拡張計画を進めている。

「町議の中にも南防波堤の撤去には反対の人もいてね。どうしたもんかなあ」

南防波堤は文字通り菊水港の南側に位置する防波堤だけど、既に港外に新しい防波堤が整備され、すでに防波堤としての役割は終えている。今では専ら釣り人で賑わうくらいだけど、それにしたって八十年近く前の施設だから老朽化に伴う事故が起きてもおかしくない。

そこで、南防波堤を撤去して大型船が通行可能な航路を掘るはずが、地元の人たちの反対にあっている。

来月、説明会を開くものの、問題となっているのは水質悪化や騒音といった環境面ではなく、呪いや祟りだった。

「防波堤を撤去する代わりに神社で祀る、とかじゃダメですよね」

「何を祀ればいいのかわからないしね。それに、それに工事対策費とかを当てていいかも微妙だし」

柳課長が腕を組んで天井を見上げる。国からの出向と聞いて初めは警戒もしたけど、親身になって相談に乗ってくれるし、私のことは同じ出向組として気にかけてもらっているのも感じている。

恩返しというわけじゃないけど、何とか力になりたい。それに、柳課長は土木課長であって港湾課長ではない。これは元々私が片付けるべき課題でもある。

「あの、柳課長」

「うん？」

「南防波堤について、ちょっと時間をかけて調べてみようと思うんですけど、いいですか？」

天井を見上げていた柳課長がすっと目を細めながら私を見る。

菊水港の拡張は南防波堤の撤去だけではない。やるべき業務が多い中でどこまで呪いや祟りなるものに注力するのか。すでに残業を重ねながら業務を捌いている状態で、私も相手が柳課長でなかったらこんな提案はしていない。

「そうしてくれると助かるかな。理想論かもしれないけど、どうせやるならみんなが納得する形で進めたいしね」

困ったような笑みで表情を崩しながら、柳課長は私が欲しかった言葉をくれた。

＊

翌日、私は早速町営の図書館に向かった。町役場に残る菊水港の資料は戦前の記録に乏しく、戦後、既に南防波堤が整備された状態からスタートしており、南防波堤自体の来歴は追えなかった。

「それでは、確認が終わったら事務室までお声がけください」

「ありがとうございます」

図書館には事前に一報を入れていていたから、スムーズに非公開の書架へと通してもらえた。

金属製のラックには昭和初期から中期にかけての統計などの記録や郷土誌などが所狭しと並べられている。可能性は低いけど、この中にヒントが眠っている可能性がある。わざわざ調査の時間をもらったわけだし、柳課長に何か成果を届けたい。

そう意気込んで、本の群れに挑んだわけだけど――

「大事な部分の記録がごっそり抜けてる……」

二時間ほど片っ端から本を漁って、得られた唯一の成果が口から溢れる。

戦前の菊水港を写した写真を見つけることはできた。まだ漁船の利用がほとんどだった頃で、南防波堤の姿はない。次に出てくるのは一九五〇年の空中写真で、既に南防波堤が写っている。つまり、南防波堤は戦中か戦後すぐに建設されたことは間違いないけど、その経緯や設計などに関する資料は一切見つけられなかった。

「戦争中だったから、記録が残せなかった……？」

呟いてみて、首を振る。確かに戦時下で正確な記録が難しかったり、散逸してしまった資料もあるだろう。

だけど、菊水町が米軍の空襲を受けた際の被害や撃墜数といった記録はあるし、当時の海軍兵士と住民の交流なんて資料まで残されている。

まるで、南防波堤の記録だけが意図的に抜き取られているような違和感。でも、一介の港湾施設に過ぎない防波堤の記録を残さないことに何の意味があるんだろう。

あるいは、その意味にこそ、呪い、祟り、恩知らずといった撤去反対の意見とつながるのだろうか。

考えてもそこが繋がらない。柳課長に相談したらまた違った見方をしてもらえるだろうか。

ううん。柳課長の負担を減らしたくて調査をしてるのだから、今はできるだけ頼らないよう

にしたい。
「頭を使ってダメなら足を使う、ね」
気合を入れ直すため両頬をパンパンと叩いてから図書館を辞し、公用車で次なる目的地に向かう。
目的地に近づくにつれ、開けっ放しの窓から波の音が入り込んできた。

＊

現場百回、というわけではないけど、港の現場も書類だけではわからないことがある。
そういうわけで、件の南防波堤に来ると、一人の老人が釣りをしていた。
昨日、町役場に来ていた男性だ。ちょうど魚がかかったようで竿が大きくしなる。大物なのか、海に引きずられるように男性の体が大きくよろめきた。
「あ、危ないっ！」
咄嗟に男性の元に駆け寄って、後ろから胴を抱える。よほど大物の大物なのか、二人でも海の方へと持っていかれそうになった。
「竿を放してっ！」
「甘かっ！　このまま引っ張っぞ！」
「はあっ!?」
竿を放さないものは仕方ない。まさか後ろから突き落とすわけにもいかないし、精一杯老人の体を引く。
やがて、弾かれるように魚が釣り上がった。勢い余って尻もちをついた私たちの上をキラキラと真っ赤な鱗が通過する。
「おおっ、珍しか！　こりゃメデタイばい！」
老人がカッカッと笑って鯛を持ち上げて振り返る。目が合うと、その目をすーっと細めた。
菊水町の作業着を着た私を見て誰か気づいたらしい。
「なんじゃ、役場の」
「豊島です」
昨日は伝えなかった名前を伝え立ち上がる。老人は複雑な表情を浮かべながら手早く鯛を処理すると、大きなクーラーボックスに収めた。そして、そのかわりに何かを取り出す。
「あの、教えてもらいたいことが」
「少し待っとれ」
老人が手に持っているのは缶ビールだった。まさか飲むつもりかと思ったら、老人は口を付ける事無く缶を傾け、中身を防波堤にかけ始めた。やっていることはビールを捨てているはずなのに、まるで防波堤に飲ませているような。

「ワシャ、若い頃は船乗りだった。つっても、ガキだったけん下っ端も下っ端ばってん」
缶が空になると、老人はその場に腰を下ろしポツポツと零すように語り出した。
「それに、もう船の油がなかった。だから、船はずっと菊水港ば泊まってずうっと空ば見上げとった」
老人は私より先の空を見上げる。遠くの光を見るように過去の記憶を眺めているみたい。老人の若い頃、足りない燃料、船が見上げる空。
パチパチとパズルがはまっていくような感覚。つい先ほど読んだ郷土史の記録と繋がっていく。空襲の記録、撃墜された飛行機、海軍兵士と住民の交流。
そうだ、この人が乗っていたのは漁船でも貨物船でもない。
「撃つことがあれば撃たれもする。戦争が終わる頃にはこの船も穴だらけで、油があっても動けんようになってな。鉄くずにして売って町の復興に当てるって話もあったんだが」
老人がザラザラの防波堤の表面を撫でる。愛おしむような、懐かしむような、柔らかな手つき。昨日、役場で杖を振ってた時とは大違い。
「最後まで町を守ってくれた船を鉄くずにするなんてできんかった。だから、ワシらはこの船にはずっと町を守ってもらうことにしたったい」
先ほどから老人は防波堤を指して「この船」と言っている。予感が確信に変わるにつれ胸がザワリとする。
つまり、私が立っているこの防波堤は。
「船に土を詰めて完全に沈めてな。バレんように全部コンクリートで覆ったとよ」
老人はそう言うと立ち上がる。それ以上は何も語ることなく、クーラーボックスを台車に載せると手押し車の様にして防波堤――かつての乗船を後にした。

＊

柳課長が防衛省の知り合いを辿ったところ、菊水町で浮き砲台として係留中に終戦を迎え、除籍となった船が明らかとなった。
松型駆逐艦「粟」。それが菊水港に防波堤として眠っている船の名前だ。日本の各地には「粟」と同様に戦後防波堤として沈められた軍艦があり、文字通り軍艦防波堤と呼ばれているらしい。
菊水町でその事実が伏せられていたのは、現地の独断として船を防波堤としたことの発覚を恐れてだったのかもしれない。
柳課長と二週間かけて調べた結果をまとめていると、その柳課長が疲労を溜め込んだ顔をして戻ってきた。視線が合うと、その顔にくたびれつつもハッキリとした笑みが浮かんだ。
「豊島さんのおかげで一歩前進だね」

「じゃあ……！」

「うん。とりあえず町内では認めてもらえたよ。菊水港の改修案の見直し」

飛び上がってそのまま柳課長に飛びつきたくなるのをどうにか堪える。代わりにデスクに戻った課長にお茶を手渡すと、少しニヤリとしながら受け取ってもらえた。

「よく認めてもらえましたね。南防波堤を拡幅延伸して、そのまま岸壁として使うなんて」

南防波堤の撤去の反対理由として想定される理由を柳課長に報告したところ、そこから課長の動きは速かった。

計画の見直し、試算を行い、町内外へ働きかけた。言葉にすると簡単だけど、元の案より将来性も工期・工費的にも劣る案を認めさせる方法は私には思いつかない。

「そこはまあ、文化庁の知り合いに手を回して……。にしても、さすがに疲れたかな。今夜くらいはごちそうを食べても怒られない気がする」

「そうしましょう。美味しい魚料理のお店を見つけたのでご紹介します」

「わ、やった」

お誘いが成功したことに私も「やった」と心の中でガッツポーズをする。この二週間、私もできる限り頑張ったし、それくらいのご褒美は許されると思う。

それに、美味しい鯛料理を出すお店の主人を見たときの課長の顔を思い浮かべると今からワクワクが止まらなかった。